



こども環境管理士、「これだ！」 自然の保育力を最大限に生かす

みやかわ よしこ
宮川 美子 さん
青梅梨の木保育園 園長
1級こども環境管理士
東京都



保育士を目指す学生さんにひと言
「学校以外でいろいろな自然体験をして、自然の楽しさなどを子どもたちと共感できるようになって欲しいと思います。子どもと同じように、生きものを育てることと捕まえることの楽しさを味わって貰えば、視野がとても広がります。」



絶滅危惧種、トウキョウサンショウウオの保護活動も。

地域の方々にも取り組みを知ってもらおうと、園のホームページでは『お庭だより』を発信中。

久しぶりの試験 子どもたちのために決意

1都3県にまたがる秩父多摩甲斐国立公園。山々が折り重なる素朴で美しい風景が連なりますが、その中で育ったという宮川さんは、子どもの頃から自然や生きものが大好き。保育士になっても子どもたちと一緒に生きものを飼い、庭づくりを楽しんでいます。

しかし昨今、身近なところからは野生の生きものが姿を消し、環境問題は今や待ったナシの状態。地球のため、そして何より子どもたちのためにできることは——。そう考えていたとき、お勤め先の園に『こども環境管理士資格試験』のお知らせが届きました。

内容を見た瞬間、「これだ！」試験というものには久しくチャレンジしたことがなく不安もあったそうですが、すぐに受験を決意。さっそく勉強を始めてみると、今まで「自然のために」と思ってやってきたことが必ずしも正しくはなかったと気付きました。

※ピオトープとは、「地域の野生の生きものたちがすむ場所」という意味で、自然を守るときの大事な考え方です。特に園児たちが日常的に触れ合えるよう園庭に設けられたものは「園庭ピオトープ」と呼んで区別され、ドイツをはじめとする環境先進国では、まちづくりのパーツであるとともに、子育ての重要なツールとなっています。

そして、制度が創設されて最初の試験ということもあり、どのような問題が出されるのかも分からないなかでの受験でしたが、見事に合格。「こども環境管理士の資格を取ったことで、自分が何をすべきなのかがはっきりと分かり、人生の大きな目標まで見えてきました」時間のたっぷりある就学前の子どもたちには、外で思う存分走り回り、人生でいちばん楽しい体験をして欲しい。今の子どもたちに足りないのは自然体験や実体験だと考える宮川さんは、子どもたちと自然のために今日もお忙しそうです。

朝から晩まで自然体験 子どもたちに「見るチカラ」が

まずは、野生の生きものたちがやって来られるよう、「ピオトープ」※を取り入れた園庭づくりを始めた宮川さん。草むらや水場、落ち葉たまり、木積みなどを設けてみました。お手本はもちろん、最も調和し無理のない、地元・青梅の自然です。

生きものたちが喜ばば、子どもたちはそれ以上に目を輝かせます。虫を捕まえたり、飼ってみたり、草花で遊んでみたり、五感を使う遊びにもう夢中。これは何だろう？とこにすんでいる

んだらう？何を食べているんだらう？不思議や発見があったら自ら図鑑を開き、黙々と調べます。「朝から晩まで自然体験をさせていますが、子どもにとっては毎日が大冒険。自分で調べたり、お友達と相談したり。子どもたちの「見るチカラ」が発達してきていると実感しています」自然から学ぶことは大人にもたくさんありますが、やはり自然は偉大な先生なんです。

職員の研修では、こども環境管理士としての考え方や子どもたちへの支援の仕方、自然との関わり方などを伝授。保育理念の内容も改訂し、子どもたちが自然に関わることも自然環境の大切さを追加、保護者にも理解が広がっているのだそう。また、青梅市保育園連合会の保育研究部長として市に働きかけを続け、研修会や講演会のコーディネートに依頼されるようになり、他園や行政の方々にも関心を持っていただけるようになりました。先日も市役所の方が園の見学に来られたのだから自然との触れ合いを通じた子育ての輪は着実に広がっています。

そのようななか、最近では園庭ピオトープで大きな発見があったそうです。「取り組みを始めてから年々生きものが増えてはきましたが、園に勤め

て35年、初めてジムグリ（ヘビの一種）などがやってきました」自然がきちんと成り立っていないければやって来ない生きものが戻ってきたということですが、実は宮川さん、「ピオトープ管理士」の資格も持ちなのです。今ではすっかり環境教育のプロになってしましました。

資格の取得を勧める理由 「もっと広い目で見よう」

ひとつ伺いたいのですが、「ご自身の園にお勤めの方々をはじめ、多くの方々にこども環境管理士の資格取得を勧めるのはなぜですか？「保育士は子どもが心身ともに健やかに成長することを常に考えています。しかし、こども環境管理士になればもっと視野が広がり、子どもたちを取り巻く環境のこと、自然のこと、地球のことを考えられるようになるのです」

宮川さんがイメージしているのは、子どもたちが大人になったときの地球。子どもたちが目を輝かせて遊んでみたくなる保育環境をつくり、自然のなかでたっぷり遊んだ「自然大好きな子どもたち」がやがてしっかりと勉強して、地域や自然を守る人になって貰いたい。そう考えています。



なんと、キボシアシナガバチを手なずけてしまいました！知らなければちょっと怖い生きものも、「知ること」で付き合っていくことができます。



みんなで生きもの探し！川にはたくさんの生きものがすんでいるのだということを、子どもたちと一緒に初めて体験した保護者も。